

第9回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「うそつきと魂管理人」

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年 藤本 美紗子



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞 〈銀の星賞〉

『うそつきと魂管理人』

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 二年 藤本 美紗子

月が出ている。

濁りのない夜空に、ぽっかりと白い月がうかんでいた。あまりにも澄んでいて、真っ黒で、まるでつくりものみたいだ。

一人の少年がベンチに身を投げ出すように腰掛け、背もたれに頭を乗せて空を見ていた。

「おれは。」

なにをしているんだろう。どこにいるんだろう。わからない。さっきまでなにをしていたんだろう。思い出せない。考えることがめんどくさい。頭がぼーっとする。すこし、からだもだるいのだ。

少年は、キャップ帽をかぶりなおすと目を閉じた。

どくん、どくん、どくん。ここはなんて静かなところだろう。自分の心臓の音がいやに目立つ。

どくん、どくん、どくん……。心臓の音にあわせて、意識がふわふわと上がった。下がったりを繰り返す。眠りにつく一歩手前のような甘い心地よさとほんのわずかな緊張感がからだを支配する。

パサリ。

帽子が地面に落ちたことに気づいて目を開けると、目の前に人の顔があった。正しくは人の顔を模した仮面のようなもので、それが人ならば目と口があるであろう箇所にも三つの穴が、少年をとらえていた。

「おや、生きていましたか」

「うわああー!」

少年は仮面から飛びのいた。心臓がばくばくしている。

よく見れば、仮面の下には胴体があり、人間らしい大きさをしている。ただ頭から足の先まで真っ黒な布か何かで覆われていた。闇に溶けるその身に張り付いた白い仮面が、じっとこちらを見つめている。

逃げなくちゃ。そう思ったがベンチから立ち上がれない。足が動かない。

仮面男（男かどうかもわからないが）が怪訝な面持ちで文句を言った。



「失礼な方ですね。人の顔を見るなりゴキブリを見たかのような声をあげるなんて」

まあ年端としはもいかないヒトの子供でさえ震えあがるほどのこの私の美貌びぼうの前では仕様のないことですが、と続ける。

美貌、だと？不気味のまちがいではないだろうか。

「なんとという嘆なげかわしき事態……！今時の人間の子供は、純白に輝くマスクに滑らかに描かれたカーブ、寸分の狂いなき配置による完璧かんぺきなバランスを織りなす三角比によって生じるこの私の美しさが理解できないとは……」

仮面男は心底がっかりだといわんばかりにその身をよじって嘆いた。

自分のことを自分でほめちぎる人はナルシストっていうんだって、聞いたことがあるぞ。

こいつのおかげで眠気はさめ、鈍にぶっていた頭の回転はすっかりよくなっていた。

「……あの、聞きたいんだけど」

「はい、マスクの美白を保つ秘訣ひけつですか？いいですよ、お教えします……」

「ここはどこだ？」

この際、目の前の怪しいナルシストが何者かはどうでもよい。もう夜遅い。早く家に帰らないと、母さんにこっぴどりしかられてしまう。

仮面男は「人の話は最後まで聞くべきです」と不満げであった。

「どこ、と言われましたも困りますね。〴〵〴〵」という場所には、〴〵〴〵という表現しかございませんので。」

そして、ああ、となにかひらめいたようにいった。

「あなたたち人間が暮らす世界を生とするなら、死んだ人間の魂が一時的に集まる場所、とでもいいましようか。」

あれ、今こいつなんていった？少年は仮面男の言葉を一語一語反芻はんそうする。死んだ、人間の、魂が、集まる？

間違いない。仮面男はそういった。

……ふう。

どうやらおれは疲れているみたいだ。言葉の意味自体はわかるけれど、こいつのいうことが理解できない。頭がうまくはたらかないのだ。

黙っている少年に向かつて、管理人はさらに続けた。

「あなたは、私に殺されたのです。」

「は！？」

なんて気味の悪いことをいうやつだ。冗談にもほどがある。

「——失礼、言い方が無粋でしたね。それでは改めて言いますが、私があるなを『いなかった』ことにしたのです。」

だめだ、こいつはまともな話ができるやつじゃない。そう思った少年は、仮面男のことばを無視してその場をはなれようとした。けれど、もし今の目の前の得体えたいの知れない相手に背を向けたら、ひといきで喰われてしまいそうな、えも言われぬ恐怖がからだをかけめぐった。つま先から頭の皮膚までもがぞわりと粟立あわだつ。

「申し遅れましたが、私、魂管理人と申しまして、この地域一帯のこの世とあの世の魂の往来を見守る者でございます。」

そういつて自称魂管理人は上体をたおし、うやうやしく一礼した。

この世とあの世の魂を見守る…? いやいよ信じられない。

「お、お前は、さつきからそんなうそをついて、楽しいのか!?!」

「うそつきはあなただ。」

管理人は静かに言い放った。そして一句一句区切るようにくりかえした。

「あなたは、大変うそつきだ。」

「おれはうそなんかついていない!」

「라이어!」

突然鋭い声でいわれて身がすくむ。

「:覚えていませんか? 昨日、例の女性に言ったこと。」

管理人は再び淡々とした調子で続けた。

「じよ、女性?」

「ほら、あなたが好意をよせている、ロングヘアかれんの、可憐かわれんで清らかそうな。」

「ああ、あいつか…!」

いつてから、しまったと思った。

「ほう、やはり君はあの女性に惚ほれているのですね。」

管理人はどこか嬉うれしそうに、からかうかのように背筋をのばして見下ろしてきた。

「ちがう!」

あいつというのは学校で同じクラスのサラという女子で、気が弱くて泣き虫で、いつも誰かの後ろに隠れているようなやつだ。休み時間にはもった髪が長くてまっすぐで、陽の光に照らされてきらきらして、きれいだなと思ったのを覚えている。自分は普段本なんかめったに読まないけれど、



あいつの読んでいる本はなんていう本なんだろうな、と気になったものだった。

「ちがう！きれいだからきれいだと思ったただけだよ！気になったただけだし！」

「主語が抜けていますよ。まあまあ、落ち着いてください。」

お、落ち着かなくさせたのはだれだ！

「話を進めましょう。今一度お聞きしますが、あなたは最後に、その女性になんと言いましたか？」

えっと、最後にあったのはたしか……。教室で、クラスの女子がいて、サラがいて、女子が「サラって、あなたのことが好きなのよ」といつてきて。たしか、驚くやら顔が赤くなるやら、気が動転したおれは……

「『おまえなんかだいきらいだ！バーカ！』」

「そのとおり！まさしくその稚拙ちせつで頭の悪そうな暴言こそが正解です！」
「いますごく失礼なことを言われた気がしたぞ。」

たしかに、そういうった直後「あ、やってしまったな」と思った。そういえば、それからあとの覚えがない。

「それで……、それがなんだよ。」

「彼女、泣いていましたよ。」

「……。」

そうか、泣いていたのか。

「まったくあなたは、彼女が嫌いだなんて大うそで彼女を泣かせたりして……」

おれが、泣かせたのか。そんなつもりじゃ、なかったんだけどな。

「あなたは大変なうそつきだ。うそをつくのは悪いことだ。悪いことをしたらそれ相応そうおうの償いつぐなをしなければいけない。それ相応の罪を受けなくてはいけない。実にシンプルなことでしょう？」

違いますか？というように管理人に見つめられる。ふと気をぬけばすいこまれてしまいそうだ。

「ほんとうに、おれは死んだのか……？」

「ええ。正式で自然な『死』ではないので、正確には『消えた』という方が近いでしょうけれども。」

「もう、みんなのところへは戻れないのか？」

「いいえ。」

そのことばにおれは食いついた。



「戻れるのか！」

「ええ、戻れないというわけではありませんよ。」

「どうやったら戻れるのか！」

「もとの世へ、戻りたいのですか？」

「あたり前だ！」

「戻って、どうするのですか？」

聞かれて、答えにつまる。

もしみんなのところへ戻れるのなら、まず、サラに会いたい。会って、何をいうべきかわからないが、このままなにもかもなくなつて、終わってしまうのはいやだ。でも、サラはもうおれとは会いたくないかもしれない。それでも…。

おれは黙ってしまったので、管理人は困つたように続けた。

「…まあ、いいでしょう。あちらには、私も少し用事がありますからね。」

「ほんとうか！」

おれはぱつと顔をあげた。すると管理人の顔が間近にあった。

驚いて声をあげる間もなく管理人の背後から青白い光が溢れ、そのまぶしさに思わず目をつむる。きつくふさいだ目の奥まで光が入ってくる。管理人の声が非常に遠くで響いた気がした。

「それでは、私が導いて差し上げましょう。あなたのいた世界へ。」

そして視界が白で埋め尽くされた。

「着きましたよ。」

移動は驚くほど早く、一瞬のできごとだった。

管理人の声に恐る恐る目を開けると、灰色のコンクリートにぶちまかれた絵の具、グリーンのスプレーでなぐり書かれた『I LOVE YOSHIKO』の文字。車道に止まる車を見れば、赤信号をにらみつけるドライバー。

まちがない。そこは学校の通学路のガード下だった。

「ほんとうに、ここはっ。」

「ええ、時間で言うときまさに私があなたをあちらへ連れて行った直後の、あなたのいた世の中ですよ。」



そこはたしかに毎日通っていたはずの場所なのに、どこか他人めいてみえた。

すると、数人の女子たちがこちらへやってきた。離れたところからでもその楽しそうな笑い声が聞こえてくる。なんとその中にサラもいた。

あいつ、あんなふうに笑ったりしゃべったりするやつだったのか。

そんなことを思っているうちに女子たちが近づいてくる。よく見るとサラの目がほんのり赤い。

ああどうしよう。まだ何をいうか考えていないのに。まずなんて話しかけたらいいんだろう。「やあ」はなんだかさわやかすぎる。「あの」じゃ他人行儀みたいでおかしいな。「よお。」いいかもしれない。よし、「よお」でいこう。

しかし、サラたちは少年の前を素通りしていった。

「お、おい！」

少年は遠ざかっていくサラたちの後姿を見ていた。

横からあきれたように管理人が口を出してくる。

「彼女たちはわれわれの姿は見えませんが、もちろん声も聞こえませんが。」

そうだったのか。無視、されたわけじゃないんだな。

管理人は続けて、「いいですか」と背筋をのばす。

「私たちはこの世界では実体をもたないものとして、この世のありとあらゆるものに対して干渉が大原則であり、絶対の約束ことです。」

「ふむ。」

「先ほどもいいましたが私たちのからだは私たちにしか見えません。今私たちが存在するこの空間には、実体のある生き物のように皮や肉や骨が存在することなく、他の空間同様に空気の粒子が漂ただよっています。」

「…ふむ。」

「よって、私たちはこの世ではどこにでも存在できるし、どこにも存在しない存在なのです。」

「ふむふむ、なるほど。よくわかった。」

管理人が疑い深げにこちらを見ているが、いったい誰を見ているのだろう。

こいつの言うことはだいたいわかった。おれたちは、いるけどいないらしい。ふむ、われながらシンプルかつパーフェクトな解釈だな。でもそれでは…。



「意味がないんだよ！」

サラに会っても、話すこともできないじゃないか。

「それならば。」

そういった管理人の口から、にゆるにゆると白いものがはい出てきた。するとみるみるうちに人のかたちになり、でんとおれの前に横たわった。髪も服もないが、今にも目が開きそうなそれは、ひどくリアルにつくりこまれたマネキンのようだった。

「テンポレリボディといってですね、いわゆる仮の魂の入れものの様なものです。」

管理人に促されるままにテンポレリボディに自分のからだを重ねる。

すると、背中にアスファルトのひんやりとした感触を感じた。少年はゆつくり立ち上がってみる。なぜか膝がぱきつと鳴った気がした。不思議なことにちゃんと服も着ているし、髪の毛もある。さっきまでただのモノだったのが、自分が中に入ったとたん、命が吹きこまれたみたいだ。何度か足踏みをしたあと、あたりを歩いてみた。ふむ、どこにも不調はない。が、やけに視界が高いのは気のせいだろうか。

「子供用のボディなんて持ちあわせておりませんので、それで我慢してください。中肉中背。年齢にして三十代後半ってところですかね。」

……なんだって？

「これで例の女性ともお話できるでしょう。」

管理人はお見通しだというようにふふんといった。そして「ただし」と続ける。

「こちらからこの世に干渉できるということは、こちらも干渉されるということです。ものに当たれば衝撃を受けますし、撃たれたら死んでしまいます。」

「くれぐれも、気をつけてくださいね」ということばをきくかきかないかのうちに管理人の首もとに飛びつく。ぐえ、とかえるのような声でしたが気にしない。そして叫んだ。

「おれだってわかんなくやしょうがないだろ、このひよつとこ仮面！」



「どうです？あなたのいた、あなたのいない世界は」
「……なかなかだよ。」

あまりしゃべると頬のかすり傷が痛い。

おれたちは、通学路から少しはなれたビル街を歩いていた。

さっきはひどいめにあった。かわいい呼び名で呼んでやっただけなのに、地の底からはいあがってくるかのような声で「よくも、私（のマスク）を愚弄しやがって貴様……！」という奴の目は本気だった。

まったく冗談の通じないやつは困ったもんだ。そう思ったがこれ以上話を広げたくないので、胸の中へしまっておく。

サラに会うという望みを絶たれたおれは、特に行くところもないので、管理人の用事につきあうことにした。いったい何をしにここまで来たのやら。

ふと、ショーウインドウに映った自分の姿が見えた。濃紺のスラックスにブルーのポロシャツ。典型的な休日のお父さんファッションだ。その表情ににじむあきらめにも似たどこか冷めたような色は、このボディによるものか。それとも自分自身か。

急に電気店の前で管理人が立ち止まった。その商品のひとつを見つめながら問う。

「これはなんですか？」

「テレビだよ。知らないのか？」

「ええ、はじめてみました。」

店頭に大型のテレビや最新型の薄型テレビなどがディスプレイされている。管理人の視線の先は、夕方のニュース番組だった。

「——爆発物は公園中央のゴミ箱内に設置されていたもようで、先日のものと同組織として捜査を進めて……」

近ごろ、物騒なニュースばかりだ。おとなたちはみんなニュースを見るというが、だれかが殺されたとか、政治家がわるいことをしたとか、いつでも気持ちが悪くなるようなニュースばかりがトップにでていて、いやになってしまう。

すると、ふいに管理人がつぶやいた。

「不安なのでしょうね。」

「え？」

「この方たちです。」

「そりゃあ、まあ、そうなんじゃないか。」



「おい、犬がいるぞ！」
上を見上げると、ビルの屋上近くの階から犬が顔をのぞかせていた。

「マリリンちゃああーん！」
近くにいた小太りの老人が叫んでいる。あのじいさんどこかで見たことあると思ったら、この前の選挙で当選した新しい区長だ。「ともに歩む未来」とやらを掲げて、動物を大切にするとかなんとかいっていた。

そのじいさんがお付の者と思しき黒スーツの男たちに抑えられるようなかたちでわめいていた。

「なんとか助けにいかんか、お前たち！」

「お言葉ですが万次郎様、爆発による火災が発生した今、ビル内に立ち入り、犬を所持、帰還は困難を極めます。誠に勝手ながら、待機が最善と判断いたします。」

「犬ではない、マリリンと呼ばんか！」といったのに対し、男は「申し訳ございません」と口だけの謝罪を述べた。

「さて、ひとつお願いしたいことがあるのですが……おや？」

管理人は少年にいったつもりだったが、そこに少年の姿はなかった。騒ぎのする方を見てみれば、万次郎に向かって一直線に走っていく者がいた。

「コンのやろう！」

背格好は中肉中背、濃紺のスラックスにブルーのポロシャツを着た男に横から殴られてふっとぶ万次郎。

すぐさま黒スーツたちが寄ってきた。

「なにをする！」

「うるさい！」

少年は怒っていた。

「そのじいさんが手に持ってるのはなんだ？てめえのかばんじゃねえか！お前は犬つころより金が大事なのかよ！お前らは、犬つころを見殺しにするつもりだったのかよ！」

瞬間、頬にはしる衝撃。

視界がものすごい速度で反転し、全身がアスファルトに打ち付けられる。ほこりと鉄のにおいを吸い込み顔をあげた少年の目に、黒光りする革靴が写った。

「ついつて……」

「一発は一発だ、中年。」



頭上から降りかかる声は、録音テープのように淡々としていた。

「……じいさんのガードマンか。お前がじいさんのかわりに犬っころを連れてきてやればいいだろう！」

「私どもの仕事は万次郎様をお守りすることだ。犬を守ることではない。」
おれは言葉にならない怒りがわいた。じいさんもじいさんなら部下も部下だ。

「ふん、見てろ！」

そういうとビルの中へと走って消えていった。われに返ったように動き出した警官に「おい、立ち入り禁止だぞ」といわれたが、「うるさい！」と跳ね飛ばしていった。

ビルに入ると階段を一気にかげのぼる。管理人がいうにはこのからだはただのいれものだというのに、殴られれば痛いし走れば息も切れる。こんなところまでリアルに作りこまなくても良いのに。

ドアを開けるとそこは火の海だった。ここまで来る間にこんなに火が広まっていたなんて。

視界がオレンジに支配される。口を開けても入ってくるのは熱気ばかりで、息が苦しい。肺が焼けそうだ。酸素が足りない。

「犬っころは……!?!?!」

炎の少ないほうへ少ないほうへと進んでゆく。

「どこだ!?! わんこやろう！」

キャン！

まだ火のまわっていないフロアの隅に毛玉のようにかたまっていた犬が、こちらをみつけてしっぽをふった。ゆれる茶色い尾が一、二、三……。

「お、おい、三匹もいるなんてきてないぞ！」

すると、すぐ横の窓がごんごん叩かれた。消防隊がへりで助けに来たのだ。鍵をこわしてやれば、まどは簡単に開いた。

「旦那！加勢にきたぜ！」

消防隊かと思った男は、Tシャツにデニムパンツとやけにラフないでたちだった。

「さっき、あのじいさんを投げ飛ばしてくれてスカッとしたよ。それからおまえさんがビルへ入っていくのが見えてな、いてもたってもいられなくなった。こいつを飛ばしてきた。」

こいつ、と言いながら、窓の向こうに見えるグレーの機体をちらりと見やる。

「…おっさん、あんた何者なんだ？」

「俺か？」

「そういって男はニヤリと笑う。」

「俺はしががない団子屋の店長さ。」
てんちょう

男は犬三匹をしっかりと抱きかかえながらいった。

「悪いが今はこれで手一杯だ。もう一度ここへ戻るから、それまで…。」

「いや、その必要はない。」

男のことは少年によってさえぎられる。

「なにいつてんだ！おまえさんも早く逃げないと危険だぞ！」

「なあに、心配するな。おれには考えがあるんだ。とにかく、一般の人たちがビルへ近づかないようにしてくれ。いいか、ヤジウマ一匹近よらせるなよ！わかつたら犬つころどもを連れてさっさと退避を！時間がない、大至急だ！早くいけ！」

「了、了解！」

少年の気迫におされて男は思わず返事を返す。

男が去ったあと、少年は三匹の犬がいた壁際かべぎわを見つめていた。犬にかくれて気がつかなかったが、そこには、黒いケースにスプレー缶のようなものや赤白黄色などカラフルな導線がわやわやと詰められていた。そのうちの導線のひとつにつながったデジタル表示の時計の文字盤は、時を刻むことなく、その数字は一秒一秒さかのぼっていく。

絵に描いたような時限爆弾だ。

「これはこれは、爆発でもしたら大変なことでしょうね。」

どこからともなく現れた管理人が、まるで今日もいい天気ですネというような調子でいった。口外にまあ私たちには関係のないことですがということばをにじませている。

「気づいていたのですか？」

「…ああ。」

男が犬を連れて行くとしたとき、いやなものが見えた気がした。それをしっかりと見据みすえた今、「いやなもの」は「爆弾」に具現化した。こんなものが爆発でもしたら、さっきのように火事ごときではすまないだろう。それでなくてもこんな窓の近くでガラスの破片が飛び散れば、たくさんの人の命が危ない。

「ところで、どうやって脱出するつもりですか？あと十分ありませんよ。…まさか、爆弾を止めるなんて言い出すのではないでしょうね。」



十分ではさっきの男の救助も待ってられない。

ライアーはふんと鼻を鳴らす。

「言っただろう？おれはうそつきライアー。」

そういつて眉間にしわをよせたまま、目を細めた。あと九分。さて、どうしようか。注射の順番待ちをしている時のように手足がぶるつとした。これが武者震いむしやぶるとかいうやつか。

そんなおれのニヒルな笑みを見て管理人はいった。

「目にごみでも入りましたか？」

そしてわざとらしくため息をつきながらいう。

「まったく、あなたは大変なうそつきだ。加えてバカだ！」

悪かったな！バカで！

「策はなし。状況は最悪。他のいのちより自分の財を重んじた愚か者に憤り、そのいのちを救うためだけに自ら危険に飛び込み、そして自分はいえば得意げに死に向かっている。考えなしの直情型で、おひとよしとはなんともちが悪い。」

そして心底楽しそうな声で続けた。

「——本当に、大変なバカだ。」

おれは爆弾の前にどっかと腰をおろす。

えっと、前に父さんとテレビで見た映画でこんなシーンを見たことがある。白と黒の導線を前にした男が、えいと一本の線を切る。止まる時限爆弾。無事に戻った男に女が「ねえ、どうして黒をえらんだの？」と聞く。そして男はキザったらしくこう答えた。「あの時…キミの漆黒しつこくの瞳を思い出してね」……だいたいこんな感じだったはずだ。(たいていの人は瞳の色は黒だと思うが、そういうのは「触れちゃいけないこと」なんだろう)

すぐ横でおれを見下ろしている、黒ずくめに白い仮面の管理人を見た。白い導線ならあるが、なんだかこれを選ぶ気にはまったくならない。

「震えていますよ。」

「ふ、震えてない！怖がってもいないぞ！」

これは武者震いだというのに失礼なやつだ。

「できもしないのに見栄と理想で動くなんて……怖いのでしょうか？」

「怖くなんかない！どうせおれはもう死んでるんだ！覚悟ならできている！」

「ライアー。」

「なんだよ！？」



「……覚悟なんて、できるわけがないでしょう。」
急に管理人の声音がスツと低くなった。

「そう口にしながら、心のどこかで誰かが助けてくれる、と思っているの
でしょう。助けてほしいと、生きたいと、思っているのでしょうか。」

「……そ、んなこと……！」

「それでいい。」

おれの言葉は管理人によってさえぎられた。

「それでいいのです、ライアー。生にすがりつきなさい。潔い最期が美德
だなんて、いつの時代のどこの国の人間が言ったのだから知りませんがね。
そんなもののウジの毛ほども美しくない。」

いいことを言っているのかもしれないが、『ウジの毛ほど』という表現が
美しいかどうかは疑問だ。おれは思ったが、黙っていた。

「どんなにひどい目にあおうとも、ひもじくても、絶望しても、汚らしく
ても生きなさい。窮地に陥って、生きる見込みが一パーセントなら、その
一パーセントを二パーセントに、二パーセントを二〇パーセントにするた
めの、最善の道を考えなさい。考えるのをやめたら、死ぬと思いなさい。」
そして、「意地汚いのは人間の得意技でしょう？」と首を傾げる。目があ
ればウインクをしていたことだろう。

「意地汚く生きることにしがみつく人間の姿は、大変美しいのです。

……まったく、このどこまでも怪しい魂管理人とやらは、たいした美的セ
ンスだよ。

「さてここで問題です。」

そう言って管理人はぴんと背筋をのばす。

「今、あなたにとって最善の道とは何でしょうか？」

おれはごくりとのどを鳴らす。

生存確率の低い場合の『最善の道』——その道以外は死。

今自分たちがいるのはビルの四五階。

あと三分ほどで爆発する爆弾。

ビル内には管理人と自分以外にいない。

爆発すれば人々の命が危ない。

導き出される答えは——ひとつだ。おれはフツと笑った。

「なんとかして爆弾をとめる！そして窓から飛び降りかっこよく着地し、
みんなから褒め称えられる！」

我ながら恐ろしいまでに完璧だ。少年はこれでどうだ！という勝ち誇っ



た表情を浮かべている。管理人の表情にスッと黒い影がさしたことにも気がつかない。

「まったくあなたは…」

管理人はその長い身を反らせてひび割れた天上を仰ぐ。そして、反りかえった反動を始めとする自分にかかる全力を少年にぶつけるかのように、

「本物だ！」

頭突きをした。

「まったく、信じがたいよ。」

管理人は姿勢を正し、コフンとため息をついた。

「今時の人間に、君みたいなバカがまだいたなんてね。……けれども、まあ、そのようなバカだからこそ手を貸して差し上げたくなるのでしょうかねえ。」

そしてフロア内をぐるりと見回し、目の前の爆弾の数字を見る。 00:48、

00:47、 00:46……。

「はてさて、どうしたものでしょうか。」

首をかしげた。

「私どもは、この世界のありとあらゆるものに対して無干渉が大原則なのですけれども…」

足元で仰向けに転がる少年を見やった。先ほどの頭突きを見事に食らった少年は、すっかり白目を剥いている。

「申し訳ありません、ライター。…ただ、素顔はあまり見られたくないのです。」

カラン。

そして、仮面が落ちる音が響いた。

気がつくとおれはシチューを食べていた。

「おいしい?..」

目の前のイスに座って同じように夕飯を食べている母さんが、おれにた



ずねる。

口の中にクリーミーなうまみが広がる。にんじんは嫌いだけど、母さんのシチューのにんじんだけは食べる気になる。

「うん、うまい。」

おれがそう言うと、母さんはそっけなく、しかし嬉しそうに「そう」と言った。

テレビではちょうどニュースが始まったところだ。画面にはビルが爆発するシーンが流れていた。このビル、あそこのじゃないか――。

「ああ！爆弾！」

それに、おれ……。

「生きてる！」

壁にあった鏡には、興奮気味の十代そこそこの若い少年の顔が映っている。間違いなく自分だ。そしてここは自分の家で、母さんのシチューを食べていて。

おれは戻ってきたのだ。

急に叫びだしたおれを見て母さんは目を丸くする。

「どうしたの、あんた？」

キャスターが事件の詳細を述べたあと、軽傷者が数人ですんだことが不幸中の幸いでした、としめくくった。

そうか、管理人のしわざか。

黙ってテレビを見つめて放心状態のおれをさらりと流すように母さんがいった。

「そうよ、生きてるってすばらしいことなの。だからしっかり味わってご飯食べて、さっさと宿題やっちゃいなさい。」

「う、うん。」

それからというもの、ずっとうわのそらだった。

夕飯を食べ終わって風呂へ入り、歯を磨いてトイレをすませたら、自分の部屋のベッドにぼすんと倒れこむ。

今日は、ひどくつかれた。ひとりでにまぶたが下がる。まぶたの上に眠気がのっしりと横たわっているせいだ。

前も、こうやって目をとじていたところに、あの魂管理人とやらが現れたのだ。そういえばあいつはどうしているだろう。ふと電球の光がさえぎられた気がして、そっと目を開けた。眼前三センチに迫る、忘れもしない白い仮面に三つの穴。



「おや、起きていましたか。」

「うわあああ！」

あれ、これってデジャブとかいうんだっけ。

「あいかかわらずですね、ライター。」

「ど、どうして普通に出てこられないんだ、お前は！」

管理人は肩をすくめるような動作をした。

「そうそう、少しお願い事があって参りました。」

「お願い事?..」

そういえばこの世に用事があるといっていた。

「『こんぱす』、というものをご存知ですか?..」

コンパスとはあの円を描くときに使う文具のことだろうか。まさかこいつの口からそんなことばがでてくるとは思わなかった。

「持ってるぞ。今は学校にあるけど。」

「お願いします!それを私にゆずってくださいませんか!」

ずいと近寄られ、反射的にのけぞる。

「い、いいけど!」

「おお、あなたはなんて良い人だ!感謝の極み!」

管理人は黒い布のようなもので覆われたからだを伸び縮みさせながら、その場でくるくる回っている。よっぽど嬉しいのだろうが、こちらから見れば宇宙人と交信しているかのようでも不気味だ。(そもそもこいつ自体宇宙人と似たようなものだけけれど)

「なんで、コンパスなんか欲しいんだ?..」

「それはもう!『こんぱす』の描く円の美しさといったら!話に聞きその姿をひとめ見たときより、ぜひとも手にしたいとかねがね願っていたのです!これこそをまさにひとめぼれというのですね!あなたと同じです!」

「サラとコンパスを一緒にするな!」

おれのこの純粋な気持ちと、こいつのわけのわからない趣味を一緒にしないでほしい。

「それで、学校にあるから今は手元にはないんだけど、どうすればいい?..」

「そうですね、宅配便でお願いします。あ、速達でなくてけっこうです。で。」

なるほど宅急便でいいのか。

「便利なものだな。」

「まったくです。」



そこで、おれは一番気になっていたことを聞いた。

「……どうして、おれを助けてくれたんだい？」

管理人はこちらに向き直っていった。

「君を死なせてしまうのは、罪な気がしてね。」

美しい私が罪人だなんて有り得ないだろう、と続いた言葉は面倒なので聞かないでおく。

「今時君のようなバカは希少種なのです。個体数の少ない生き物はいたわらなくてはいけません。そのくらいの常識はわきまえておりますよ。」

なにか、今失礼なことを言われた気がしたが、海のように広い心で受け止めてやる。

「そうか、ありがとう。」

すると、管理人ははっとした。ただならぬ雰囲気に不安を感じてたずねる。

「どうした？」

管理人はいつになく真剣な面持ちで言った。

「私が罪人なんてありえない、と言いましたが……」

まさか、おれを助けたことで、こいつがひどい目にあうのかと思うと急に不安になった。

「私のこの美しさがすでに罪ではないでしょうか……？」

……ああ、こいつの心配をしたおれは本当にはかだ！

「まったく、心配してこんなに損をしたと思ったのは生まれて初めてだ！」

おれが叫ぶにもかかわらず、管理人はふふと笑った。

「くれぐれも長生きしてくださいね。」

「言われなくても、するさ。」

管理人の無機質な目が、嬉しそうに細められた気がした。

「ややつ、そろそろ部長のお昼寝タイムが終わってしまう。」

「仕事中でしたが、自主的に休憩をとってその合間に来たのでね」と愛らしく首を傾げる。

あくまでもサボったとはいわない管理人を見送る。

「それでは、失礼いたします。」

管理人の身体が薄くなって透けていく。

「あっ、言い忘れましたが、『こんぱす』は、シャーペン型ではなく鉛筆型にしてください——」

パチン。

言い終わる前に消えてしまった。



賢治のまちから
高校生☆童話大賞

ところで、送ってくれ、と言われても、一体どこにどうやって送れというのだろうか。頼まれてから長い間送らなければ、またこちらへ催促さいそくにくるだろうか。しかし、なぜかもうあのふざけた魂管理人と会うことはないだろうな、と思った。

再び上半身をベッドへしずみ込ませる。包み込む布団の感触が心地よい。

そうだ、明日まずサラに謝ろう。そして、なんの本を読んでいるのか聞いてみようと思う。

ぼんやりとそんなことを考えながら眠りについた。

月明かりが少年の部屋をやさしく照らしていた。